
コミュニティと**集団精神療法**

(7)

— グループで体験したこと —

藤 信子

そのグループの中で、ユーゴスラビア紛争の時に家を転々としなければならなかったことなど、避難民としての暮らしを思い出しながらの発言や、他のメンバーのいくつかの発言は、怒りを表現しているように私には聞こえた。学会のテーマが“Crossing Borders, Social, Cultural and Clinical Challenges”（「境界を超える、社会、文化と臨床的挑戦」）であり、連日朝の基調講演は、我々と他者、移民、グローバリゼーション、トランスナショナルリズム（一応、脱国家主義としておく）

等についての考え、実践が語られていた。そこで触発されてグループの中ではいろんな感情が湧き出ているようだった。スコットランドとイングランドの関係も出てくるなどもあり、この学会（International Symposium of the Group Analytic Society International、以下 GASi）や国際集団精神療法学会（IAGP）での話題でよく出てくる紛争や対立（イスラエルとパレスチナなども）の問題であるとはいえ、あまり居心地のよくない感じであった。その居心地の悪さは、「私にも不

安はある、怒りもあるのだと思うけれど、どう表現してよいかわからない」という感じだった。難民にならざるを得なかった（この場合紛争での国内避難民だと思う）体験の大変さとその思いを聞きながら、この人たちは怒りの対象があるけれど、福島の避難者の人は怒りをどこに向けるのか、対象が無いんじゃないだろうか、ということ連想していた。そして次第に「怒りを表出することができない」感じについて、考えていた。

「東日本大震災等の関係者の相互支援グループ」（以下、相互支援グループ）では、この1年くらい、福島の避難者への支援についての戸惑い、悩みが何度か語られていた。避難している共同住宅の集会所への訪問は、手芸をしている人傍にいて作品の話をしていたり、茶話会に来る人は決まっていた、あまり自分の事情を話される避難者は少ないなど、支援者としてはこれで良いのだろうか、という思いを持つという話を聞いていた。そんな支援者の戸惑いを聞くうちに、相互支援グループの中で、強制避難と自主避難という区別は、避難者にとって打ち解けにくいことになっているのではないだろうか、という推測が生まれた。もちろん相互支援グループに参加し、集会所へ支援に出かけながら気持ちを聞けない状況について、自分の援助者としての力不足を感じている状況に対して、支え一緒に考えたいという思いがある一方、相当難しい支援状況だということを感じていた。また、

自主避難の場合、出てきた地域から見ると、私たちは頑張って留まっているのに、地域を捨てて出て行った、というように受け止められていることもあるということを知ると、日本の地域共同体や「村」の習慣などに思いが巡り、災害の3年後あたりから、「再統合」の問題が話されていたことと重なっていった。

この75分のセッションを4日間継続するGasiのグループの中で、思いついたのは「放射能は見えない」ということだった。それが怒りの対象の見つけにくさを、表しているようにも感じた。3年前のLisbonの時より、また2年前のRovinjのIGPAのグループより話しにくいと感じたのは、メンバーの一人がいつもは90分のグループが、ここは75分なので皆が急いでいるように感じると言っていたが、確かに話すペースが速いように感じたのと、40人くらいのグループが部屋のせいかな2重のサークルだったのもあり（私の英語能力が原因である以外に）、なかなか感じたことが言えなかったけれど、最後に「3日間グループの中で感じていたことは、数人のメンバーは怒りの対象を持っているということだった。でも私は怒りの対象を持っていないと感じた時に、おそらく福島から避難している人たちは、怒りを向ける対象を持っていないと感じているんじゃないだろうか、と思った」と発言した。福島？と聞かれたので、「6年前に原子力発電所が爆発して、今でも多くの人々が避難している」と言うと、何人かがわかっ

たようだった。それから他の人たちは怒りの対象があると思っていたけれど、紛争であれ戦争であれ、何にどう怒るのか、簡単じゃなさそうに思えてきた。ユーゴ紛争の時の話をしていたメンバーが終了後、「セルビアからきたの」と握手しながら言った。その握手のことを、私は福島から避難している人への彼女の思いなのだろうかと思った。

あるグループに参加しメンバーの話を聞き、感じたことで、自分が継続している別のグループの中で感じている問題に気づいていく。これは今回の Gasi のグループが図だとすると、相互支援グループも私の日常の中にあり、地の一部のようである。グループで起きたことを考えることで、自らの日常を理解してい

くことである。また今回のグループで、テーマに触発されたこともあると思われるが、「よく怒りの感情をだすな・・・」と感心していたが、やはりこの会議という容器 (container) が、メンバーが怒りを出しても大丈夫なように機能しているのだと思う。怒りの表現が出た後は、いろいろな感情を呼び起こしやすくなるのだろうか。それとも、グループのはじまりの不安は、怒りとなって表現されることが多いのだろうか、と今までのグループを思い返している。この夏のグループに参加することで得たことを、これからどのように生かすか、図のメンバーと地のメンバーを思い浮かべながら考えている。